

No.65 contents

- 1 春季二科展によせて
- 2 〈絵画〉総評
- 3 〈絵画〉春季展賞選考について・作品寸評
- 6 〈彫刻〉総評・作品寸評
- 8 2014春季二科展 展示会場
- 10 選抜出品者一覧 被災地児童作品特別展示
第99回展 絵画部作品研究会のお知らせ
- 11 復興支援活動 セレクション展 デザイン部・写真部
- 12 第36回定時会員総会・アンケート結果を受けて 役職一覧
- 13 百周年事業報告・連絡 寄稿随筆
- 14 バリ賞 研修報告
- 15 計報 第99回二科展日程表・巡回展日程
- 16 大隈理事表彰 お知らせ 事務局だより 編集後記



2015年 二科展は
100回展
を迎えます

春季

発行人：田中良 発行：公益社団法人二科会
<http://www.nika.or.jp/> TEL：03-3354-6646



春季二科展 開催



春季二科展に

よせて

田中良

新緑眩しい上野の森、東京都美術館で、春季二科展が開催された。会期中休館日があり、一日少なかったにもかかわらず、入場者が大変多かったことを喜ぶ。

会場は、展示委員、夫々担当委員の努力で、絵画、彫刻共展示の配慮が行き届き、鑑賞者の感想も大変好評であった。

今年は大作シード作家に特別130号大の制作を依頼したが、その期待通り、意欲的な力作を出品してくれた。若手作家の養成は急務で、常に心して方策をたてなくてはならない。

又一方、会員の春季展についての認識にかなりの差があることに気付く。二科会の趣旨とか綱領に示されているとかの問題ではなく、芸術に携わる者は、常に冒険と創造を繰り返しつつ人間性と共に歩むものだろうから、もし低調だったと気付かれた会員は、私を含め、反省して頑張ろう。

来年に迫った二科百周年展への準備も、実行委員の骨折りで、手筈通りに進行中。事務局の奮闘と共に感謝する。



春季二科賞・上石直美



春季賞・高木陽



春季賞・村山成夫

まずは春季二科展の選考者、春季の受賞者の皆様、おめでとございました。改装後の都美術館で再開した春季展は本展受賞者の選考、新人奨励、会員の実験的製作の発表の場とする事を三つの柱としています。絵画部では春季二科賞、春季賞を設け三回目を迎えました。賞審査はやはりまず、民主的公平さ、透明性が大切です。授賞式でも生方常務理事が審査内容を詳細に報告しましたが、この二科ニュースにおいても審査内容を公表したいと思えます。審査内規に基づき、展示日に出席した絵画部会員49

一切の情実なく粛々と厳正に投票により審査が実施された事を報告します。

受賞者3名とも一般選抜者、大作シード作家、具象的作品であった事は特筆すべきですが、これは各審査員が具象、抽象を問わず、作品の密度と独自の表現、画面に込めたエネルギーを基準に作品本位で選考した審査結果です。ですから受賞傾向として捉えるのではなく、他の作品と価値観が違うことに誇りを持ち、今後自分の芸術を深めることを望みます。団体における審査は制作者が制作者を選考するので、常に奨励の視点が必要です。また投票による審査は最大公約数的作品が評価されるリスクもありますが、特異な光るものを見抜く事も大切にしつつ公明な審査を続けることの重要性を痛感しました。

春季展賞選考について

山中 宣明

名をもって審査会とし、大作シード作家を含む50名の選抜出品の中から審査した結果は以下の通りです。

受賞者3名とも一般選抜者、大作シード作家、具象的作品であった事は特筆すべきですが、これは各審査員が具象、抽象を問わず、作品の密度と独自の表現、画面に込めたエネルギーを基準に作品本位で選考した審査結果です。ですから受賞傾向として捉えるのではなく、他の作品と価値観が違うことに誇りを持ち、今後自分の芸術を深めることを望みます。団体における審査は制作者が制作者を選考するので、常に奨励の視点が必要です。また投票による審査は最大公約数的作品が評価されるリスクもありますが、特異な光るものを見抜く事も大切にしつつ公明な審査を続けることの重要性を痛感しました。



開場を待つ来場者の長い列



初日開場前の展示作業

春季展総評 絵画部

ハイブリッドな春季二科展 香川 猛

上野公園の桜の新緑が眩しく感じられる好季節に、2014年の春季二科展が東京都美術館で開催された。4月17日(木)の初日は、午前の展示準備と賞審査・結果発表と続き、厳しいスケジュールの中を会員諸氏のご尽力により、午後2時のオープンにこぎ着けることができた。

一般の入場者もオープン前には入口に行列ができる程の盛況で、賑やかなスタートがきれた。

2日目の18日(金)から23日(水)の最終日までの入場者は順調で、作品を食い入るように熱心に見る人や友人同士で思いを囁き合う人達もあり、終日会場は肅々とした光景であった。

春季二科展は若手の育成と奨励をコンセプトの一つとし、昨年の本展受賞者を選抜した。優秀作品には賞を与え、会場も1室から4室を使い、前面に押し出す形をとった。出品者のモチベーションも高揚し、新鮮で斬新な作品が増え、特に1室はすばらしかった。

一方、会員諸氏には本展

のミニチュア版にならないよう、実験的な作品を発表する場をコンセプトの一つとしている。持ち味を一步前進させた作品が目立つようになった。

最近の車社会ではハイブリッドカーが人気上昇で、売り上げも伸びている。「ハイブリッドカー」とはガソリンと電動モーターなど複数の動力を組み合わせた低公害車のことだ。若手受賞者と経験豊富な会員が互いに協力し、切磋琢磨して盛り上げていくさまはこの車のエネルギー駆動に似ている。二つのコンセプトが「虻蜂取らず」にならないよう、継続した反省と実行が肝要だと思う。



会場2室



会場1室



会場10室

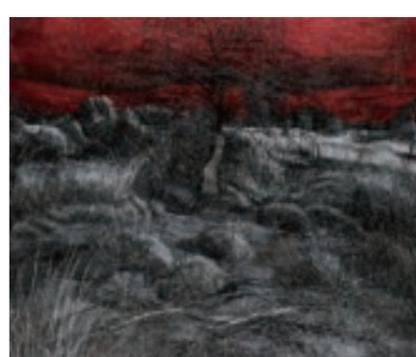


図録販売受付

会員による 受賞作品寸評



村山 成夫「色はにほへど」 F130



高木 陽「柳と赤い空」 F130



上石 直美「ゆらぎ1401」 F130

村山 成夫
移ろい行く生命の栄枯。花期を過ぎた、蓮の姿を、鳥か虫の眼を擬して、萎えた蕊や虫喰いの跡を描いた。拡大と微細の対比が面白い。選ばれた多くの作品の中で、一頭地を抜くのは容易ではない。作者の技量を駆使した、よい作品を期待する。
(松室 重親)

高木 陽
斜面の大地を白黒のモノトーン、そして赤い空の風景は会場の中で異様な空気を放つていて足をとめた。赤と白黒だけの色彩の特異性と共に、広げられた大地の植物の入念な描き込みが大きな魅力となっている。主題の柳の木はもって存在感を見せてもいい。
(西 健吉)

上石 直美
ブルーを主調色とした作品である。鮮やかなブルー系のハイモニーと隠し味的に薄いパイオレットが配され心を和ませてくれる。有機的直線と曲線がうまく融和し、色彩に透明感があり、蓮池の水面のゆらぎが感じられる。構成員もすばらしく爽やかな風を感じさせる。
(木戸 征郎)

会員による 作品寸評



添野 忠 「ある日の訪問者」 F100



今泉 あかね 「anticipation」 F100



川畑 清美 「方船一宙へ」 F100

添野 忠
目に見える女性を描きながら、その奥底に潜む目には見えない何かを感じとり描き出そうとしている狙いは伝わる。女性から発する人間性や体の丸み、背景となる空間との距離感、コラージュされ飾られた絵の配置等画面調和に研鑽してほしい。(横前秀幸)

今泉 あかね
精神の状況を抽象する画面をじっと凝視すると、作者の感性に染み込んだ平凡な日常が現われ不思議なリズムを感じる。内面性の表現の曖昧さを追い詰めることと、調和を逃れて独り歩かざる方向にある別の世界への展開発見に期待します。(横前秀幸)

川畑 清美
複数の人物が一つにまとまり天に向かっている。下の二人の女性は何を思っているのか、ストーリーは深まる。上部には何があるのか観る人に想像させる。民衆を率いる自由の女神の様でもある。キュービズム的表現は、構成力とデッサン力を物語っている様である。(木戸征郎)

会員による 作品寸評



三宅 敦子 「沈黙2014」 F120



篠原 涼子 「pond」 F130



高山 章亮 「繫留」 F130

三宅 敦子
落ち着いたローズグレーの中に3体のトルソが配置され、ダークグレーの帯面や数字、アルファベットが効果的で都会的な色彩センスを感じる。これから色彩感を生かし、トルソのフォルムや構成の研究でさらなる内面表現を試みたい。(西 健吉)

篠原 涼子
風景を色面で捉え、四季の移り変わりが画面いっぱい表現されている。平面的な表現は、洒落た作品を生み、色彩的には、鮮やかで、変化と調和が工夫され、特に曲線美が印象的である。暖色と寒色のみごとな調和は、大オーケストラによる名曲演奏の様にも感じる。(木戸征郎)

高山 章亮
港で出番を待つ間の時の流れを熟練した写実の技量で表現し鉄の錆びた臭いが画面から漂ってくるような重厚な力作。青の中間色と茶褐色の色調も美しい。穏やかな港風景の中に人生を無言で暗示している。孤高を保ち職人に徹する作家に育ってほしい。(横前秀幸)



安坂 伸司 「シンフォニー」 F80



鈴木 文明 「王子駅」 F100



岸 ユキ(富巳) 「オクラ」 F130



所 智恵子 「竿燈広場の人達」 F130



吉田 紗知 「残響」 F130

安坂 伸司
全体的には曲線が組み合わさった動きのある作品である。線の効果が生きてくる。左下一部が気になるが、全体的にはモダン性があり、擬人化された作品となりおもしろい。人物と器物が音符の様に組み合わせられ、まるで交響曲が生み出されているようだ。(木戸征郎)

鈴木 文明
鳩になった作者は現実の人間社会から逃れて、夢と希望のコミュニティを鳥瞰し図として表現している。美術史やアートの領域のみに存在するのではないことを一考させられるが、写真の映像を離れ葛藤や衝動の境界線を加筆すればより表現の密度も深まる。(横前秀幸)

岸 ユキ(富巳)
春野菜オクラをモチーフにした作品は、作者自身がオクラの中に入り込んだような観察でねばり強く描かれている。黒い背景(空間)も効果的で白い花、オクラの緑が上品で美しく生き生きとした大画面を創り出している。左下の空間面積が画面を引き締めているので大切にしたい。(西 健吉)

所 智恵子
若手作家らしい大胆な構成で、右側に大きな横顔が並び左は広場の空間である。これは作者のイメージを形成する心象風景であろうが全体的に画面は明るく色調にも個性が見られる。感覚的、心理的に捉えた幻想的な風景を感じさせる作品で新鮮感がある。(吉井英二)

吉田 紗知
白系の広い背景の中に大きく描かれた女性像は肌の色と共に赤系や緑が効果的に配されて、明るい色調の中で美しくインパクトの強い作品に惹かれた。これからは色彩センスを生かして空間の色面構成により深まりや人体の構成位置、トリミングについても研究してほしい。(西 健吉)



大坪 義武 「犬一思考回路一」



瀬戸 志保 「拾う女」



仲子 亜未 「パン屋のお兄さん 頭像」



こじま マオ 「CLING TO THING (物への執着)」



吉田 朋世 「兎菊」

発泡スチロールの原型をシリコン型から石膏にした作品が、昨年までの仕事から更なる挑戦をしているのを感じられます。愛犬でしょうか！多くを語らずとも作者との親密な感情が伝わってきます。

大坪 義武 (津田裕子)

混沌とした塊の中から、いきなり形を彫り出したような仕事です。石という硬い素材で軟らかく、そして今にも動き出しそうな雰囲気表現しています。ガラスの扱いに少し疑問が残りました。

瀬戸 志保 (津田裕子)

材質はブロンズ。意欲的な制作態度を感じる。ほとんど曲面の頭像全体を、方形でまとめようと、努力している。首部に少し難があるものの、パンを頭上に乗せるという発想は、新鮮で、好感がもてる作品である。

仲子 亜未 (市川明廣)

擬人化兎、ブロンズの優作である。首骨、背骨には、それぞれ瓦棧を配し、造形的に美しい。表面処理も、ダンボール紙、紐などの表現で好感がもてる。具象的な彫刻とするならば、体重を支える前足は、さらに強い形になって欲しいと思う。

吉田 朋世 (市川明廣)

会員による 作品寸評

春季展総評 彫刻部

百周年を前に 日高頼子

新緑の季節、2014年度春季二科展が東京都美術館で開催されました。彫刻部は出品数43点と昨年より多く、展示空間もすっきりと、気持ちの良い展示でありました。

昭和53年に造形上の実験



的創造を謳って発足した春季展の趣旨を思い致すに、招待新人の中に、明日を予感させる生きいきとした造形姿勢が観られた事は何よりの喜びでありました。来年は二科会創立百周年とのこと。創立当時、フランス留学などをしている大いに刺激を受けた先人達が美術界に革新運動を起して発足した二科会でありましたが、大正8年(1919)、まだ彫刻部がない時分に、藤川勇造が彫刻の出品で会員に推挙されたのが彫刻部の萌芽と言えましょう(それ以前には岸田劉生が「男の顔」という彫刻を1点出品したことがあったそう)、写真に則したそれは立派な作品であったとのこと。

す)。その後、藤川勇造を中心とした彫刻の出品者が少しずつ増え、10年後には130点もの搬入があったとの記録があります。その間フランスから、オシツプザツキン(第11回展に4点、第12回展に7点、第13回展に3点、第17回展に1点)、マイヨール(第13回展に2点、第17回展、アーキペンコ(第14回展)、ピカソ(第17回展)等の巨匠の作品を迎え、二科会のみならず日本の彫刻界にも大きなセンセーションを巻き起こしたといえます。彫刻を志す若き彫刻家達は大いに夢をふくらませ、吸い寄せられるように二科会彫刻部へ出品したものだ、今は亡き淀井敏夫先生が語っておられました。



林 一平 「ピオトープー孵化一」



森田 博之 「雄羊」



川本 拓 「みなも」

楠の木片を集成接着して基本的な材をつくり、緻密に組み合わせることによって有機的な生息空間をつくり出している。このところ自分なりの方法論を手に入れて摩訶不思議な空間を演出できるようになった。今後が楽しみな作家である。

林 一平 (西村文男)

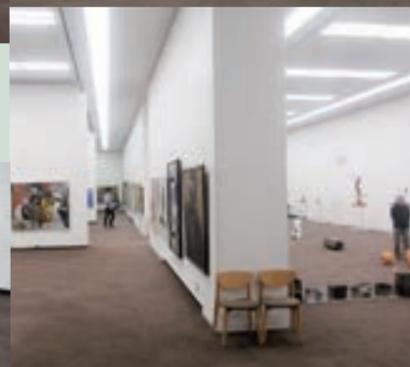
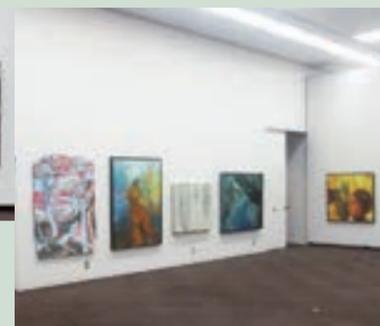
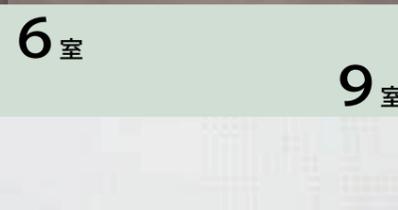
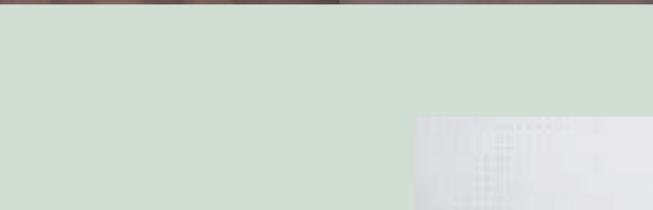
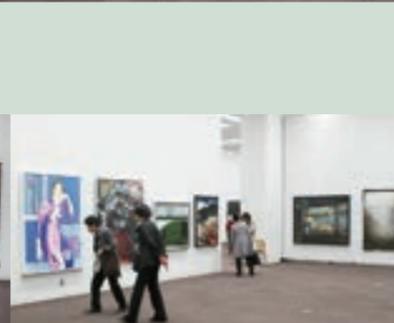
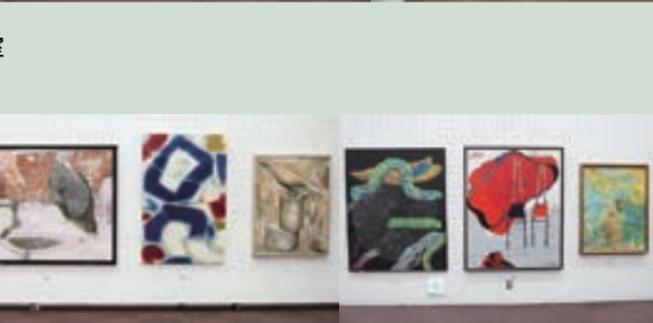
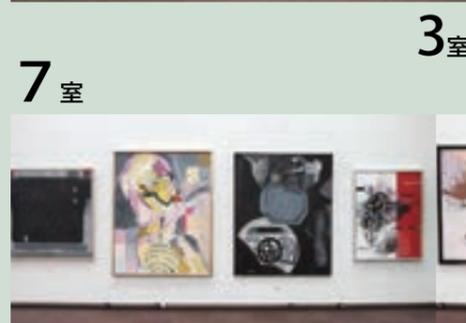
楠の丸太の形状を生かした作風である。丸太の円周が雄羊頭部の彎曲した鼻梁と角に重なるように造形されている。とは言うものの頭部から目・鼻梁・角にかけての形を彫り出さないと作品にならない。気配だけの未完の作である。

森田 博之 (西村文男)

自然そのものに潜んでいる生きていく証を探り出し、伝統的な量塊性を主軸とした彫刻とは違った道筋で表現しています。繊細かつ揺れるような命の輝きを持った木彫作品です。

川本 拓 (津田裕子)

2014春季二科展 展示会場



会場 東京都美術館
会期 2014年4月17日～4月23日

	(絵画)		(彫刻)		計	
	名	点	名	点	名	点
会員展示点数	125名	125点	35名 (会友含む)	35点	160名	160点
選抜者展示点数	50名	50点	8名	8点	58名	58点
展示点数	175名	175点	43名	43点	218名	218点

8室

2室

1室

3室

4室

7室

6室

9室

5室

10室

第36回 定時会員総会

日時 平成26年5月24日
午後1時～3時40分
場所 国立新美術館講堂
出席会員163名(委任状出席65名)により総会成立。
出席理事

田中 良 生方純一
松室重親 吉井英二
川内 悟 菅原二郎
吉野 毅 宮村 長
香川 猛 吉井 浩
大隈武夫 中原史雄
西 健吉 山中宣明
中島敏明 黒川彰夫
小田信夫 島田紘一
出席監事
木戸征郎 尾崎 功
前田耕成
議長 菅原二郎

第1号議案
平成25年度事業報告
議長により議事資料に基づき報告があった。

第2号議案
平成25年度決算承認の件
川内理事より財務諸表ならびに収支計算書の説明があり、木戸監事より監査報告が行われ、満場一致でこれを可決した。

第3号議案
平成26年度事業計画報告
議長より議事資料に基づき、平成26年度の事業計画の説明、報告が行われた。

第4号議案
平成26年度正味財産増減予算書報告
川内理事より議事資料に基づき、平成26年度収支予算案の説明、報告が行われた。

第5号議案
任期満了に伴う新役員承認の件
議長より別紙添付資料に基づき、任期満了に伴う新役員選任案の説明が行われ、議長より役員各人ごとの承認を求めたところ、満場一致で原案通りこれを可決した。

第6号議案
会員アンケート結果報告
松室理事より会員アンケートの結果報告が行われ、中原理事より詳細な説明が付け加えられ、出品規約検討委員会、選挙制度検討委員会、春季展検討委員会が設置される事が報告された。

第7号議案
百周年事業報告
吉野理事より詳細な報告がなされた。

以上により総会の議事を終了し、議長は閉会を宣した。この後、休憩をはさみ、田中理事長より新役員全員の現職重任人事が報告され、満場の賛同を得た。

アンケート結果を受けて 中原史雄

昨年末に実施した会員アンケートは、118名から回答があり、項目ごとに貴重な意見が寄せられた。集まった意見を受け、理事会では、内容を精査し議論を重ねているが、評議員会でも検討のため、全評議員に個々の意見を記した資料を送付した。5月24日の会員総会で、特に問題提起の多かった、選挙制度について・審査と出品規約について・春季展の方向性について、以上3点、それぞれ検討委員会を立ち上げ継続審議して行くことと松室常務理事から報告があった。

二科百周年展 第100回記念二科展 概要きまる 百周年事業報告

3月28日、東京都美術館に関係者が集まり、二科百周年展全体会議が開催され、会期、会場、主催(予定)がきまった。東京展オープンまでのスケジューリング、出品者リスト(案)、出品交渉の役割分担、図録の概要などが話し合われた。リストアップされた作品からは、まさに「日本近代洋画の歩み」を実感するとともに、二科会の歴史の重さを認識させられた。

第100回記念二科展に特別展示される作家を、二科戦後期を代表する物故作家から、絵画14名、彫刻7名を候補として選び、出品交渉をすることになった。

百年史に掲載する作品に著作権があることがわかり会員、会友、ご遺族に、著作物使用許諾書を作成した。この作業においては、委員会の担当者、二科会事

題として、出品者と入場者をいかに増やすかが大切だが、若手が存在感を示すなか、ベテラン作家にどう輝きを与えるか、その施策も重要である。これらの迅速な対応として、昨年まで初日におこなってきたギャラリートークと講評会を一本化し、作品研究会にする。延べ46名の会員が参加、出品者の質問を聞きアドバイスを与える合評形式になる。また会期中には、新たな出品者を勧誘するためのギャラリートークを実施、入選するには何が必要かを語る。来年は百回展を迎える。出品者の思いを結実させ、より魅力ある展示空間にしたいものだ。

- ※以下の項目について会員を対象に、記述アンケートが実施された。(2013年11月12日集計)
- 1. 選挙制度について
- 2. 展示について
- 3. 審査について
- 4. 巡回展について
- 5. 支部運営について
- 6. 作品集について
- 7. 二科ニュースについて
- 8. 春季展について

◆総会終了後、絵画部、彫刻部はそれぞれ個別の部会を持ち、活発な発言、意見交換となった。

公益社団法人二科会 役職一覧 (平成26年5月24日現在)

代表理事(理事長)	田中 良	評議員(絵画)	埴 珠世
常務理事	(絵)伊庭新太郎		
理事	(彫)松室重親		
	(彫)吉井英二		
	(彫)菅原二郎		
	(彫)川内悟		
	(彫)吉野毅		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
監事	(絵)木戸征郎		
	(絵)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
名誉理事	(絵)石川進		
参与	(彫)細井良		
	(絵)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		
	(彫)宮村長		
	(彫)香川猛		
	(彫)西健吉		
	(彫)中島敏明		
	(彫)小田信夫		
	(彫)島田紘一		
	(彫)木戸征郎		
	(彫)尾崎功		
	(彫)前田耕成		
	(彫)石川進		
	(彫)細井良		
	(彫)文田哲		
	(彫)荻原寛		
	(彫)高藤寛		
	(彫)日高頼子		
	(彫)綿引道郎		
	(彫)島田紘一		
	(彫)小田信夫		
	(彫)大隈武夫		

パリ賞 研修報告

スペイン、フランス旅行記

北村美佳

(第96回展 パリ賞)

私が訪れたのは6月。スペインも南仏も真夏の太陽が照りつけ、色とりどりの花が咲きみだれる明るく開放的な季節でした。

旅の始まりはバルセロナ。ガウディに圧倒され、美しい旧市街にたまたむピカソ美術館を堪能し、鉄道でアンダルシアへ。

いくつものオペラの舞台にもなったセビリアは、今回最も楽しみにしていた地のひとつ。サンタクルスという旧市街に入ると、迷路のように細く曲がりくねった石畳の道が続き、あちこちから陽気な声が聞こえてくる。



アルルの街とローヌ川



アヴィニョンにて

スラムの名残がスペインにあって独特の雰囲気。昼間は世界遺産のカテドラルや、街並みをスケッチし、長い夜はタブラオへ。魂の底から響いてくるような歌声とギターに酔っていると、美しい踊りが狂ったように踊り始め、その場の空気が一気に張り詰める。それぞれが強すぎるくらいに自己主張をしながらも、ぴたりと一つになる気持ちの良さには嫉妬してしまうくらい。でも、ずっと前から私の奥に眠っていたものが呼び起こされたような感覚。そして、その情熱を絵筆に託してみたいと、強く思ったのです。数日間、夢の中にいるような時を過ごしたあと、次の目的地はゴッホを魅了したアルル。しつとりと落ちていたその街は、描きと

めて帰りたい風景ばかり。時をかけて修繕されてきたテラコッタの瓦の一枚一枚や、石積みのも一つ一つまでがいとおしくて仕方がない。ゆつたりと流れるローヌ川越しにアルルの街を眺めてスケッチしていると、今を生きる人々の暮らしとともに、その背後に広がる歴史がしみじみと感じられ、追いつけるのです。

旅はこのあともまだまだ続き、たくさん魅力的な街に出逢い、刺激をもらいました。ここ数年、少し迷いを感じていた私に、再び風景と向き合える時間を頂いたことは今後の大きな励みとなります。すべてへの感謝の気持ちを次へのエネルギーにして、これからも制作に打ち込んでまいりたいと思います。



スペインカルモナ スケッチ

山崎美恵子

(第97回展 パリ賞)

11月22日、早朝にパリのホテルに着く。まだ街には人影も少なく、ホテルのロビーでボートと時間の経つのを待つのももったいないので、アムステルダム



赤い特急電車でアムステルダムへ

のゴッホ美術館、国立美術館、市立美術館、そして今もあると言う飾り窓を見ても面白い。大きなトラムはホテルに預けて、今夜は帰ってこない事を伝え、ノルディ(パリ北駅)へ引き返し10時25分発のアムステルダム行きになんとか乗り込んだ。初の体験だし初のアムステルダム。車中は蚤の市へ行くという、跳ね橋へもと、絵を描く仲間4人での旅はワクワクドキドキで始まった。

アムステルダム中央駅、なんと東京駅によく似ている。駅の近くで今夜のホテルを探し無事チェックイン。小雨の中トラムを利用して美術館探し、ゴッホ美術館は残念ながら工事中で閉館、すぐ隣に国立美術館があった。中世・ルネッサンス期から20世紀のオランダ芸術はフランスにも劣らない歴史があった。フェルメール、レンブラントと暗いイメージの中VSOOPに入った古伊万里の皿にも出会えた。アムステルダム市立美術館は近現代美術を対象とする美術館でゴッホからカンディンスキー、ツィトヴィッチ・キルヒナ、マルク・ジャガール、アンリ・マチス、ジャクソン・ポロック、カレル・アペル、アンディ・ウォーホルなどなど初日は時間がなくて翌日に計画したのが正解、どの絵の前からも離れがたく半日以上を美術館内で過ごした。若い画学生達が寝ころんだりして模写している。まだのお方は必見の場所。パリ行きまで時間があつたので運河を行く船に乗り込み船中ではスケッチをしまくった。

ポリさんと言われようがパリは幾度訪れてもシャンゼリゼ通りは外せない。買い物を楽しむ柄でもないが、どうしても、うろついてしまふ。11月末になると夜のシャンゼリゼ通りはクリスマス一色。ドキドキする程の光の洪水。家族連れで賑わっていた。このはしゃぐ気持をスケッチできる技もなく、写真を撮りまくった。翌日はグランパレで開催中のホッパー展を見る事に。行列ができていて1時間半も待った。ホッパーの描く具象画は明るい色彩なのに暗い印象を受けるそれを確かめたくて。その後、カロの「ボン・ヌフとネールの塔」やヨシキントの「パリの光景・セーヌ川」の絵などを思いながらセーヌ川沿いを歩いた。ボン・ヌフは直訳すれば「新橋」の意味だがパリでは最も古い橋になってしまった。下流の方からセーヌ川とボン・ヌフを望むという構図はその後、芸術家達によってしばしば描かれていた。私もボンデザールからシテ島、ボン・ヌフをスケッチ。芸術か、観光か、ファッションか哲学か。興じるのも又楽しい。

計 報

会員 興 柁 忠光氏 逝く



二〇一四年四月十六日逝去 享年90歳
ご遺族 興柁満須子(妻)
〒八七六〇〇六三
大分県佐伯市城西一A-201

略 歴

一九七六年 第61回展特選
一九七九年 会友推挙
一九九六年 第82回展会友賞
二〇〇五年 会員推挙
二科会大分支部、支部長



第97回展出品作 夜なべ F50

会友 上月 隆彦氏

二〇一三年四月二十日逝去 享年78歳
ご遺族 上月史枝(妻)
〒四五六〇〇二二
愛知県名古屋市中熱田区沢上 一六一三〇

略 歴

一九八七年 第72回展特選
一九八九年 会友推挙

会友 押尾 美代子氏

二〇一三年八月八日逝去 享年84歳
ご遺族 三輪由美(長女)
〒六七二一一二三
兵庫県姫路市網干区坂上二九八

略 歴

一九八五年 第70回展特選
一九八七年 会友推挙
一九八九年 第74回展会友賞

会友 梶原 良造氏

二〇一四年一月三日逝去
ご遺族 梶原君子(妻)
〒六三三八一一三
兵庫県西宮市甲子園口 四一七一四

略 歴

一九七五年 第60回展記念賞
一九八五年 会友推挙

会友 宇高 龍氏

二〇一四年四月二十七日逝去 享年91歳
連絡先 栗原清道
〒七九一三二五三
愛媛県伊予郡松前町大溝三三二

略 歴

一九八〇年 第65回展特選
一九八四年 会友推挙

会友 寺園 和己氏

二〇一四年四月二十九日逝去 享年84歳
ご遺族 寺園和子(妻)
〒八九一〇一〇二
鹿児島市星ヶ峯三二二三八

略 歴

一九九五年 第80回展二科賞
一九九六年 会友推挙
二〇〇〇年 第85回展会友賞

お知らせ

支部展・個展・グループ展の案内を二科会HPに掲載ご希望の方は、DM(案内状)などに、「HP掲載希望」と明記して二科会事務局宛てに郵送・FAX又はメールにてお知らせください。

E-mail: nika@nika.or.jp

第99回二科展 日程表

8月

21日(木) 搬入(業者・個人)
22日(金) 搬入(個人) 16時まで
23日(土) 26日(火) 審査
27日(水) 入落通知発送
29日(金) 30日(土)

9月

1日(月) 2日(火) 個人選外作品搬出

2日(火) 展示日
3日(水) 展覧会初日
テープカット 10時
作品研究会
[絵画] 12時~14時
授賞式 15時
懇親会 18時

6日(土) ギャラリートーク [絵画] 13時
7日(日) ギャラリートーク [絵画・彫刻] 13時
9日(火) 休館日
12日(金) ミニコンサート (KUKKA) 18時
13日(土) ギャラリートーク [絵画] 13時
14日(日) ギャラリートーク [絵画] 13時
16日(月) 展覧会最終日 14時まで 敬老の日
17日(火) 搬出[絵画・彫刻]
18日(水) 搬出[絵画]

第99回二科展 巡回展日程

◆富山展

富山市民プラザ 平成26年9月20日(土) ~ 9月28日(日)

◆名古屋展

愛知県美術館ギャラリー 平成26年10月7日(火) ~ 10月19日(日)

◆大阪展

大阪市立美術館 平成26年10月29日(水) ~ 11月9日(日)

◆京都展

京都市美術館 平成26年11月27日(木) ~ 12月7日(日)

◆広島展

広島県立美術館 平成27年1月6日(火) ~ 1月11日(日)

◆福岡展

福岡市美術館 平成27年2月17日(火) ~ 2月22日(日)

◆鹿児島展

鹿児島県歴史資料センター 平成27年3月4日(水) ~ 3月15日(日)

**大隈武夫理事
平成25年度
地域文化功労者表彰**

文化庁では、各地域において文化振興に功績をあげた団体・個人に対し、文部科学大臣表彰をしています。茨城支部の表彰に続き、大隈武夫理事が地域の芸術発展に貢献したとして、「地域文化功労者表彰」を受けられました。お祝い申し上げます。



事務局だより

昨年引き続き第36回定時会員総会は田中理事長の提言により、ひな壇を作らない会場設定での開催となりました。今年は二年おきの役員改選の年でもあり、理事信任投票・評議員選出意向投票を内規通りに履行。定時会員総会は理事会で検討し承認を受けた議案がすべて報告・可決され、そして理事会を経て新役員人事が報告され、百周年に向けての新体制が決まりました。

事務局ではスタッフ総出でこの一年、根気と集中力とチームワークを要する時間をひたすら費やし、百年もの歴史を築いた会員会友

の名簿、出品者・受賞者の記録等一覧を作成。そして記録に漏れないかの検証にもゴールが見えて参りました。データのデジタル化により、記録の閲覧が容易になり、出品作品等の検索もいずれできるようなものと思われます。

6月10日の報道で、2020年・東京五輪の主会場となる国立競技場の建て替えに伴うモザイク壁画保存問題で、壁画13点全てを文化的価値が高いとして保存する方針が決定。その13点中約半数が故人で元二科会理事の大沢昌助氏、寺田竹雄氏の作品である事は二科会会員の一人として、とても嬉しく誇りに思いました。

来年、第100回記念二科展発刊予定(二科70年史以降)

資料を探しています

次の年代の出品者目録をお持ちの方は、事務局にご一報下さい。

- 第11回二科展(1924年)
- 第12回二科展(1925年)
- 第13回二科展(1926年)
- 第15回二科展(1928年)
- 第16回二科展(1929年)
- 第47回二科展(1962年)



帝国ホテル二科サロン

東京・銀座帝国ホテルの小ロビーに、二科サロンとしたコーナーウィンドウを設けております。平成25年からは二科展受賞者の小品を年間4期に分け、展示・販売しております。場所柄多くの人の目に触れるコーナーです。7月8日から3期目を展示します。



左右とも寺田竹雄氏
(左「よろこび」正面玄關横壁画)

の二科30年史を執筆される美術評論家・瀧悌三氏は、週に1〜二度事務所を足を運ばれ、取材インタビューや資料を詳細に読み込み、執筆されていらつしゃいます。二科会のお話を伺うとまるで生き字引のよう！

二科展100年の歴史は本当にドラマチックです。先輩方が築いて来られた歴史の重みを感じながら、現在私達は、その歴史を更新しております。

第99回二科展・第100回記念二科展に、その素晴らしいコラボレーションが、展示や記録の面でも見られるよう、田中理事長のご指導を受け、一層努力し、進めて参りたいと思います。

事務局長 塙 珠世

編集後記

機関誌「二科」について

機関誌「二科」、通称二科ニュースは、1979年6月に法人化の発足とともに、第一号が発刊されました。その第一号、当時の吉井理事長の記事「発刊の言葉」には、——新しい第一歩を踏み出す、これを機会に会員向けの機関誌を出すことにした。機関誌といつても会員相互の消息や疎通を図り、また会の運営や諸事業に関しての報告など、二科ニュースともいうべきものであり、ささやかな体裁で出発することになったが、ともかく発刊の運びとなったことは会員諸兄とともに喜びたいと思う。本誌の今後の発展を考えると、会員からの励まし、支部活動の状況などをどしどしご報告いただき、できる限り誌面をにぎわしてほしいとお願ひする次第である——とあります。

併せ持ちます。先の会員アンケート「二科ニュースについて」の項目では、同感の意見も多々で、今後どのような在り方を目指すか、多くの課題の提言をいただきました。引き続き忌憚のないご意見をいただき、展覧会開催の報告を柱に、会の運営を明快に伝える誌面であるよう、更には会員、会友、出品者の顔が見える発言を掲載できるよう努めます。

今号は展覧会報告の形を、多少変えてみました。会員数氏による作品寸評と、地方在住の方々へ春季展の雰囲気を感じていただきたく、展示会場案内を試みました。全展示壁画掲載とはならず、さらに企画を練ることが必要な様です。

編集委員

- 委員長(総) 野村 みそら
- 委員(総) 本間 千恵子
- 〃 〃 深見 まさ子
- 〃 (彫) 幡 青果
- 〃 〃 宮澤 光造

平成二十六年八月三十日発行
 公益社団法人 二科会
 〒110-0022 東京都新宿区新宿4-13-15
 レイフット新宿 501号室
 電話 03(3335)6646
 FAX 03(3354)4768